

## 【文芸時評】

### 内面の対象化としての文学

横尾和博

いささか旧聞に属するが、昨年「文学界」11月号で同人誌の動きが紹介されたことは前号でも触れた。伊藤氏貴による最近の同人雑誌の傾向と分析である。また「文学界」を受けて、10月26日の朝日新聞朝刊の文芸時評では、斎藤美奈子の「非日常への裂け目」と題した批評が掲載されていた。伊藤の論は、同人誌の作風は「未だに圧倒的にリアリズムであり、舞台は日常である。かつて身辺雑記的と揶揄された私小説的作品が多く」、「リアリズムから外には半歩たりとも出ようとはしない」との評価で、一方「商業誌新人賞の応募作品はマジックリアリズムだったり漫画的キャラ化だったり日常的には理解しがたい要素がくつきりと分かれている」という。

斎藤はそこに日常と非日常の裂け目を見ているが、私は作家の目線や視線の相違をあげたい。同人誌によく取り上げられる「日常」を描いた作品には、異世界や境界を外周とした自己の内面の対象化が欠如しているような気がする。宮沢賢治のいう「心象風景」を描かなければ単なる作文や自分史と変わりない。いかに文学としての目線、視線、とりもなおさず作家の哲学観や文学観を確立するのか、ひとり一人に問われる。

さて昨年二〇一〇年の文学界の動きを総括しておこう。小説では哲学なき時代に悪を象徴するかのように、中村文則の『悪と仮面のルール』は父親殺しがテーマで絶対悪に対する愛を説いた。作中の長い哲学談義が埴谷雄高を想起させる作品である。高橋源一郎『悪』と戦う』は、少年による世界を救うための地獄巡りが表層ではあるが、二つの世界が展開される並行物語や善悪の理念など同時代の作家たちの作品批評とも読めた。パラレルワールドといえば村上春樹は昨年の『1Q84』ブームの余韻が残るなか、続編であるBOOK3を発表した。主人公の男女の並行譚がひとつに統一されていく物語は完結することなく、新しい世界の展開を予兆させる話題作で、人間の心の闇、魂の奥底を世に問うた。また一昨年末に発売された東浩紀『クオンタム・ファミリーズ』もパラレルな世界を描き独自の世界と批評性で一石を投じた。贗金を武器に国家や資本主義に挑む話を書いたのが島田雅彦『悪貨』。一見荒唐無稽にみえるのだが共同体、通貨などの根源を考えさせられる作品である。阿部和重『ピストルズ』は前作の続編、出身地の山形県の町で起こる不可思議な物語を「神町サーガ」として描いた。同様、一貫して故郷の神話的世界を舞台とした大江健三郎は、過去の作品群と共鳴し合う『水死』で健在であることを見せつけた。小説のイデーが複雑化する状況の中で、素朴な人間の感情と心理をうまく織ったのが、山田詠美『タイニーストーリーズ』。短編でシンプルな話なのだが強固な世界を確立している。綿矢りさ『勝手にふるえてろ』も二十代女性の恋愛観をストレートに表現した作品で時代に屹立している。また電子書籍としても話題になった村上龍の『歌うクジラ』は電子書籍版が7月に先行配信され、映像と坂本龍一の音楽を取り込んだ手法は衝撃を与えた。作家による電子書籍の新会社設立もトピックとなった。同書は近未来の絶望的状况からの希望を描き、少年の地獄巡りの設定が同世代である高橋源一郎の作品とのダブルイメージとなった。

また文学書ではないがサンデルのほかに、岩崎夏海の『もし、高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』(通称「もしドラ」)が、驚異の売り上でドラッカーブームを巻き起こした。内田樹と並んで注目される文筆家のひとり、平川克

美の『移行期的混乱』は、現代とはどのような時代か、私たちはどのような時代に生きていくのかとの見識を示し卓越していた。平川の『経済成長という病』と合わせて読むことをお勧めする。また電子書籍の動きも目が離せない。私は「電脳」の世界に懐疑的だが、新しいメディアの到来を簡単に斬ってしまつてよいのかどうか、深慮が必要である。

ここまで書いたときに一月の芥川賞、直木賞のダブル受賞の報に触れた。注目すべきは四十三歳、中卒でフリーター、日雇い仕事をしながら私小説を書く西村賢太。型破りの私小説作家の誕生は同人雑誌に集う人たちと、寄る辺ない若者たちに希望の灯りを点す。秀作「落ちぶれて袖に涙のふりかかる」は私の住む町、東京赤羽が舞台でシンパシーを感じた。

さて話題を転じて同人誌の動向に注目してみよう。本稿は一月中旬に筆を執っているので、その時点で編集部から届いたものが対象となっている。

「蒼空」15号、米沢朝子「密 misoka」は、若い男が父の若い愛人と関係を結んでしまふ話。ストーリー性よりも作品の持つ密度に注目したい。米沢作品は私たちのありふれた日常を素材にとりながら空想やファンタジーを描く作品が多い。日常と非日常の境界をよく理解している書き手。今後はマジックリアリズムの世界にも挑戦してほしい。同誌の渡辺智恵「消失の町」は太平洋戦争の話であるが、そのなかの主人公の内面の非日常をよく描き、自分史とは異なる世界を提示している。これが自分史と文学の違いである。

「海」(四日市市) 82号の遠藤昭己「ヒロシマの幽霊」は、出版社を退職し地方に引つ込んだ男のもとへ、昔担当していた漫画家の消息が寄せられてきた。その漫画家は被爆者で、子ども向け漫画を描いていた。その漫画家との関わりを主人公は回顧する。テーマ、構成、文体ともしっかりとした作品。広島、原爆、被爆者など人間存在の根本に関わる主題とモチーフに深い共感を覚えた。また一見幸次の川上弘美『溺れる』を紹介した「短編小説集コレクション5」も長年川上を愛読し、批評してきた私にとって嬉しい一文だった。現代文学を紹介、批評する作品が同人誌のなかに広がることを期待している。

「構想」49号の「夢三昧」 島山拓は不思議な作品で、夢か現実なのか混沌とした世界のなかで、ストーリーが流れるように展開していく。前述のマジックリアリズムの世界である。同様に陽羅義光「雁木坂追補」もマジックリアリズムである。斎藤美奈子の説のように、日常と非日常の裂け目を巧みに描くのが陽羅の特徴。連載として始まった崎村裕「百年後の友へ」は、大逆事件の新村忠雄にスポットをあてた小説。世は「坂の上の雲」ブームであるが、同時に忘れてはいけないのが大逆事件であり、文学でいえば漱石である。完結が待たれる。評論では岩谷征捷「西行の恋」が秀逸である。

「まほろば」70号では、石原滝子「虹のあとさき」は昭和三十代のころの大阪が舞台で、ヤクザの男に惹かれていく女性を描いた。テンポよく比喩が巧みだ。河野アサの連載「まほろば(二)」、こちらは奈良が舞台だが主人公の女性の感情の機微がよく表現されている。「お金を出せば非日常は買えるのだろうか」との詠嘆が本稿のテーマにしっくりと馴染む。

「詩と眞實」737、738号では角田真由美「菓の中の小さな芽」、父親と二人暮らしの五十歳の男の家に、あるとき若い女性が突然訪ねてきてそのまま居着いてしまう。男は彼女に愛情を抱くようになるが、暗い過去がある彼女はやがて家を出て、夫のもとに帰っていく。筆力のある書き手で素材もおもしろい。説明文を短くし、描写を重ねてたたみかけるよう

に描いていくと、この書き手の真骨頂である凄味が出て、ナンバーワンになる。黒川嘉正「母の夕日」は十九枚の短編だが、入院した老いた母への思いが息子の視点でよく描かれている。題名が出色。

「二十一せいき」16号、古岡孝信「風が哭く」は、昭和二十年の敗戦を六歳で迎えた男の子が成長し、過去を振り返る話。自分の出生には秘密が隠されている、そんな思いが男にはぬぐいきれない。しかし戦後も六十五年が経ち家族との葛藤も遠い過去になり、生家も荒廃したままである。戦争、家族、コミュニティなど多くの事柄を考えさせられた。

「小説藝術」52号ではエッセイの石川友也「そしてオフエア星へ」がランボーの詩に託して、日常生活のなかで文学に対する思いをさりげなく語る秀作。羽鳥善行『カラマーゾフの兄弟』を読む』は、自分の読書史に合わせてドストエフスキーの大作のポイントを要領よく読者に紹介する。その手際よさに感心。一方カロッサに託して謎めいた小説に仕上げたのが川島徹「幻の紳士」。竹森仁之介のライフワークである「海を渡って生きた人たち」のシリーズも健在。

50号を迎えた「蠍」では、阿部愛子「遠い朝の私」、四十年近く子ども病院に勤めた女性の退職時の回顧譚。東京の下宿に一人暮らしをした学生時代の苦悩を振り返る。テーマは優れ、文章もしっかりしているがやや単調、場面の転換と凝縮が必要かもしれない。

同じ信州の同人雑誌で、70号を迎えたのが「顔」。山崎文男「月見草」は、絵画教室で知り合った若い女性から月見草の鉢植えを預かってほしいと頼まれた男の困惑と思慕を描く。月見草の比喻が見事。

信州の雑誌を続けて紹介すると、文芸誌「O（オー）」の終刊にともない、新たに登場したのが「出現」創刊号。寺山あきの「彼が望んだこと」は、定年退職した男が妻に邪険にされ一人暮らし生活を始めるが、妻の病氣と死に立ち会い妻の存在の大きさに気がつく話。読みやすい作品だが、主人公の心模様をもっと描くことが必要かもしれない。

「科野作家」24号では「アイデア」気賀沢清司、「浮浪者たちの夏」小泉悦夫、評論の『それから』について「小沢正男が目立った。気賀沢作品は連載で今回が三回目。日本一のハコビ、と小題がついている。ハコビとはホテル嬢の送迎を担当する仕事のことだ。東京下町の風俗もよく表現されており完結が楽しみ。「浮浪」の原点を問い直しながらいまやホームレスと呼ばれるようになった寄る辺なき人たちに思いを馳せた秀作。漱石の「それから」を論じた小沢の作品は、五感表現をもとに「トリッキーな解釈」としながら官能小説的な読みを提示し、目が覚めるような思いがした。優れた批評であり脱帽である。

「婦人文芸」89号では陶山竜子「十字路」が出色。働きながら大学院へ通う三十代半ばの女性の話。事件は起こらず、ただ淡々とした日常を描きながら主人公の内面を鮮やかに映しだしている。この時代に私たちは何に仮託して自らの内面を語ればよいのか考えさせられた。吉本ばななを想起するような小説。菅原治子の評論「太宰治とその死」も読み応えがある。また菅原の「活動報告」では、陽羅義光が勉強会で語った「小説における必要十ヶ条」を紹介している。この勉強会の試みが多くの人誌に広がればよいと考える。

野中麻世のミニエッセイ『悪人』映画と小説』も興味深く読んだ。昨年この映画はオリコンランキングでも邦画部門の一位だったが、私も強い感銘を受けた映画。

「素粒」8号では、たちりえ「夏の訪れ」は若い女性の心の揺れを上手に表現し、若栗清子「ゆるやかな悪意」は幼なじみの三十代女性同士の長年の確執を描く。両作とも女性

の心理の綾が巧み。

「人間像」180号では、笹原美穂子「スターブルー」の持つ清々しい世界が印象に残った。北海道から男と上京した若い女性がまた帰るまでの体験譚だが、なんでこんなに澄んだようなイメージが小説を支配しているのか驚嘆。根保孝栄「同人雑誌評」はいつも興味深く読む。灯台のように多くの書き手に針路を示している。そのほか同誌には優れた小説がたくさん掲載されていて読み応えがある。

「視点」74号、筑紫亮「奪われる」は、韓国に観光にいった男がガイドの韓国人女性に思いを寄せる話。旅行に比喻されているが人生の旅の果てに邂逅した女性にも何かが喩えられている。

「海」（太宰府市）71号、有森信二「幻日」は進学塾教師の中年男性が同僚の女性と不倫を重ねる日々を描く。最初の出だしの文章が「決め」の言葉になり、ストーリーをひっぱっていく。熟した書き手である。

「文芸同人 長崎の会」の痛快さはコミックマーケット（コミケ）に集った若者たちで会を成し、ワンテーマで会員が小説作品を持ち寄ることにある。第5号の今回のテーマは「同人」で秋田しんのすけ「北航路」ほか作品を寄せている。時代が変わるときは必ず若い世代の新しい試みが興る。

「季刊 遠近」41号、難波田節子「同級生」は親の面倒を見るために子どものころに住んでいた町に戻る女性の同級生交歓話。事件も起きずささやかな日常だが、読み手の心が温まるような作品。

「文藝軌道」10月号、黒羽英二「東京スカイツリー時空を超えて」、あべ・ゆきえ「あおいろ…」の二作。黒羽作品は、建設中のスカイツリーを見に行く話なのだが江戸から東京へ移行した知の地層を逍遙するような話で感心した、あべ作品は短いながら「語り」調で若い女性に荒廃した心を独白させる。可能性のある書き手で今後に期待したい。

「河」157号はストーリーカーに追われる女性の恐怖を描いた浅利勝照「逡巡」が迫力ある心理を描きおもしろく読んだ。

「九州文学」12号は新鋭創作特集で五人の新人作品を掲載。なかでは黒瀬章「蜜柑」が五感豊かで才能のきらめきを感じた。ベテランでは波佐間義之「めばえ」が目立った。少女に思いを寄せる小学校高学年の男子を描き、仄かな恋心が破れる心理を描くだけではなく、その背後にカネミ油症の問題を忍ばせている。

「市民文藝」50号では荒井登喜子「終焉」は地方の特養ホームで働く若い男性が主人公。その孤独な心がよく表現されている。

「長崎文学」65号、野沢薫子「落葉の日々」は、入院した夫の看病と家事に明け暮れる女性が、高校時代に交遊のあった夫妻の生き方を回顧し、人生を改めて考える話。女性の鬱屈がうまく描けている。

「孤愁」8号、豊田一郎「電動人間」は妻が逝った後、都会のマンションで暮らす近未来の孤独な高齢者を描く。地域の民生委員から家事を賄う女性仕様のアンドロイド（ロボット）を勧められて男は「彼女」との生活を始める。現代社会への風刺を込めて人間の心の「情」の在り様を描く。

「東京作家クラブ」445号のエッセイ「目覚し時計」藤田愛子は、一人暮らしの喜怒哀楽を目覚まし時計に仮託した優れた作品。藤田の皮膚感覚は小説だけでなくエッセイにも現

れていて好感を持った。

原石寛は引き続き私家版で随想選集や作品集を作成しており、その熱意に敬服。

「全作家」80号の掌篇小説特集は実に三十三名の書き手が織りなす世界で本領發揮の企画である。目を惹かれたのは北本豊春「愛美の夢」、江藤あさひ「息子」、小野村誠「心の旅は珍道中」、マックあつこ「ミディアムの夢」、美倉健治「縁台将棋」、古倉節子「牛のサムソンが別れる日」。一概には言えないが、それぞれ個性が光る作品である。

字数の制限で触れることはできないが気になる作品を挙げておく。「文学街」279号の森啓夫「拓植の里」（後篇）、評論では吉岡昌昭『蟹工船』の著者・小林多喜二は何故拷問で殺されたのか？」が優れている。特に在日の戦後を描いた「柘植の里」は秀逸。「碑」95号の

昆道子「まなく玉の唄」は鬼をキーワードとした短編を豊かな感性で描く。

「北斗」11、12月号では山中幸盛の連載「児童虐待担当必殺仕事人」。「野火」27号の土生田繁晴「ウエイティング」、中山典子「シナモントースト」、水嶋元「一発」。「風の森」14号では皆川勤の評論「抒情の根源」。「風」84号の随筆、阿部良行「善良なる悪質運転者」。「断絶」107号、吉田善穂の連載「終わりのない旅」の二回目「二度目の結婚」。そのほか気になる同人誌は「柵」287と288号、「春風」25号、「吉村昭研究」12号、「北方人」14号など。

また私宛にお送りいただいた単行本についても、ひと言述べさせていただく。崎村裕の作品集「三重塔」、古岡孝信「オープン・スクール」、作品集「動物のいる話」のなかの富崎喜代美「掌篇小説 愛しい人たち」。特に崎村の作品集はライフワークともいえるべき「お寺譚」で出色。古岡の小説は寂れゆく地方を舞台とした老人と子どもたちとの交流を笑いと涙で描く。単行本以外で今回のベスト6は米沢朝子「密 misoka」、古岡孝信「風が哭く」、波佐間義之「めばえ」、陶山竜子「十字路」、角田真由美「巣の中の小さな芽」、あべ・ゆきえ「あおいろ…」。

私たちはありきたりの日常を生活している。そこに非日常との裂け目を見て、内面を対象化できるのは作家の特権である。いまこの拙い文章を読んでいたあなたにあなたの心象風景にはなにが映しだされているのだろうか。それをぜひ言葉に換え、作品にしてほしいと願う。

#### 筆者プロフィール..

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座講師。現在時事通信、北海道新聞、東京新聞で書評を担当。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢、中西哲生などのレギュラー番組の企画・構成、台本制作を担当。人気番組「愛川欽也パッキンジャーナル」ではコメンテーターとしても毎週レギュラー出演中。ラジオでは東京FM「クロノス」で、文学や読書に関するトークを展開。著書「村上春樹とドストエーフスキイ」「新宿小説論」ほか、共著「立松和平 ドロップアウト」「立松和平 文学の修羅として」ほか。ホームページは、ネットマガジン「週刊！横尾和博」、「横尾和博の赤羽B級グルメ物語」。

※発行された同人雑誌を事務局まで一部お送りください。